



詩のおくりもの 4

社会の詩

鈴木志郎康 編





詩のおくりもの 4

社会の詩

鈴木志郎康 編



筑摩書房

詩のおくりもの 4 社会の詩

鈴木志郎康

1935年東京に生まれる。早稲田大学仏文科卒業。61年NHKに就職し、77年に退職。詩人。詩集に『罐製同棲又は陥穽への逃走』など多数がある。ほかに評論、小説などでも活躍。

1981年9月25日 第1刷発行

編 者 © ^{すず き し ろ やす} 鈴木志郎康

発 行 者 ^{ぬの かわ かく さ え もん} 布川角左衛門

発 行 所 ^{ちく ま しよ ぼう} 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

電話 東京 (291) 7651 (営業)

(294) 6711 (編集)

郵便番号101-91 振替東京6-4123

Printed in Japan

明和印刷・積信堂

(分類) 0392 (製品) 14004 (出版社) 4604

乱丁・落丁本の場合には御面倒ですが本社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



社会の詩 目次

私と詩の出会い——反抗心とことばをつかむ

うつうつとした受験生時代 7

反抗の姿勢を学ぶ 12

ことばによる感覚の解放 23



社会の詩

ざらりと光るダイヤのような日 茨木のり子 35

愉快なシネカメラ 清岡卓行 40

くらし 石垣りん 43

白い巨大な 黒田三郎 46

いやな唄 岩田 宏 51

ゴオルドラッシユ 小熊秀雄 55

戦争 金子光晴 65

呼ぶもの 木原孝一 70

祖母のうた 木村迪雄 73



コレガ人間ナノデス 原 民喜 77

水ヲ下サイ 原 民喜 78

生ましめんなかな 栗原貞子 84

片腕 安東次男 87

魚を奪う 永井善次郎 93

重たい草 押切順三 97

東京へゆくな 谷川 雁 101

毒虫飼育 黒田喜夫 104

アイヌの血 森竹竹市 111

エカシの死 森竹竹市 113

沖縄よどこへ行く 山之口獺 118



見えない町 金時鐘

126

便所掃除 浜口国雄

132

絵の宿題 関根弘

137

私と詩の出会い——反抗心とことばをつかむ



うつうつとした受験生時代

わたしが最初に詩を読んだのは何歳なんさいのときだったか余りよく覚えていない。おそらく国語の教科書にのっていたものであろうが、教科書にあった詩については何も覚えていない。

しかし、詩を書き始めたのは、十六歳か十七歳のときであったのは覚えているから、自分で自覚して詩を読み始めたのもその頃ころのことであらう。高校生になってから、映画を見ることに熱中し始めて、一年間に三百本近い映画を見ていたのが、二年三年になると文学同人誌をクラスメートと作ることに熱を入れるようになっていた。

どういうわけか、わたしの学年には文学が好きなものが多く、ひとつの学年で同人誌が競って発行されていた。多分、国語の先生に小説などを書いている人がいたので、その影響きようだったのであらう。

私の通っていた高校は東京の隅田川すみがわの近くにある日大一高にちだいいちこうだった。大学の附属高校ではないが、余り受験勉強をしなくても日大ならはいれるという高校だったから、映画を見たり、小説や詩を読んだり、同人誌を作ることに熱中していられたのであらう。

わたしは三人か四人のクラスメートと『癡癡ちやんちやん』という題の同人誌を作っていた。その同

人誌にいくつかの詩を書いたように覚えているが、その頃はむしろ小説を書くことに一生懸命だった。どんな詩や小説を書いていたのか、余りよく思い出せない。そして、自分がなぜそのように早い時期からことばを使って詩や小説を書くようになったのかわからない。教科書にのっていた詩については記憶はないが、教科書にのっていた文学作品では、井伏鱒二の「山椒魚」とゲーテの「ウィルヘルム・マイスター」の中から抜粋された「ミニヨン」というのを覚えている。この「ミニヨン」がきっかけになって、ゲーテの作品を読むようになっていったからだ。

『若きウェルテルの悩』というのを、よく理解したかどうかはわからないが、とにかく読んで熱っぽい印象を受け、古本屋に行つて戦時中に発行された赤い表紙の非常に悪い紙の『ゲーテ全集』を買いあさつて読んだ。そして『ゲーテ詩集』を読んだのが、もしかしたら、詩集というものを読んだ最初の体験だったのではないかと思う。

『ゲーテ詩集』はロマンチックな詩集として、夢想的な少年の心によく合ったと思うのだ。わたしが生活していた東京の下町と、ゲーテの詩に書かれていることは全く関係がなかった。

片方は十九世紀初頭のヨーロッパの貴族的な世界であり、片方は戦災後の復興ようやくなされて、どうにか着る物と食べる物が安定して手にはいるようになったという、貧しい、日本の下町の世界である。生活には何の共通点がなくても、人の心をとらえることができ

るといふことばの力、詩の不思議な力の非常によい例とでもいふべきだろう。

ゲーテ詩集には、イタリアの明るい風景が書かれ、恋人への思いが歌われ、ドイツの森の、人を引き込むような魅力が描かれていたという印象である。わたしはその風景の感じ方や、恋人への思いの述べ方などを真似して、自分があこがれている女性への思いを詩に書いた。というよりも、ゲーテの詩を読んで、そんなふうな詩を書いてみたいと思つて、自分が好きになる女性を求めていたといったほうが正確であるようだ。

もちろん、それがうまく行くはずもなかった。しかし、そのうまく行くはずもないことを、何度も何度も、まるでドン・キホーテのように繰り返していたようなところがあった。ドン・キホーテは騎士道物語を読み過ぎたために、自分も物語の中の騎士になったような気持になり、行く先きざきで、囚われの姫を救おうとして、また怪物と戦おうとしてさんざんな目に会わされるが、わたしもゲーテの詩を読んで恋に悩む青年になりたいと思つたわけだった。

ことばの力というものは、現実の自分を忘れさせてしまうものなのだ。

特に、わたしは目前に大学受験をひかえていて、つらい受験勉強から逃れるために、空想の中に生きようとしていたのだらう。わたしは勉強はそれほどできるわけではないのに、エスカレーター式につながっている目大にはいるのがいやで、他の大学を受けたいという気持もあつて、自分を心理的に一層つらいところに立たせていた。実際に、大学を受験し

てみごとに失敗したのだった。

受験生の現実を切り抜けるためには、受験勉強をして大学にはいつてしまえばよいのだが、その受験勉強というのが、わたしには無意味に思えて、そんなことをしては本当に生きる時間を浪費ろうひしているように感じられて仕方なかった。従って、一方では受験勉強をやらなくてはと思いながら、他方ではそれがいやで文学書を読み耽ふけるという生活になった。

大学にはいるために受験勉強に励はげんでいる浪人ろうにんの中にいて、そういう浪人たちの姿が非常にうとましく思えたものであった。自分は文学を理解する特別な才能を持っているのに、与あたえられた受験勉強に精を出して、一生懸命になっていられる連中と自分が同じ立場にいるということが、ひどく不当に思えることもあった。

無味乾燥むみかんそうな参考書を開くと、たちまちわたしは空想の中に引き込まれた。だから並の受験生風に勉強の予定表などを作っている、その予定はいつも予定のままに終わってしまうのだった。高校を出てから、結局わたしは三年間も浪人した。その浪人の一年目二年目は、自分が勉強もせず何でも問題を解けてしまう天才であつたらどんなにいいだろうと、ひたすら願ったものだった。

早熟そうじゅくの天才数学者エヴァリスト・ガロアの伝記を読んで、ずいぶんあこがれたのもこの頃のことである。ガロアは十九世紀中頃のフランスの数学者で、決闘けつとうをして死んでしまっ

た人だけれど、彼は中学生の時に、つまらない授業をさぼって図書室で数学の勉強をして、たちまちのうちに初歩から高等数学まで身につけてしまい、しかも高次方程式の独自の解法を見つけ出す一方、政府打倒の革命運動にも身を投じる熱血児でもあった。

その彼が高等師範学校の入学試験で、口頭試問のとき、出された問題を自分が考え出した解法であっさり解いてしまい、試験官の教授のほうを理解できないでいると、その教授たちの顔に白墨をぶつけ、出て来てしまうというエピソードもあった。また彼は決闘で死ぬ前夜、今まで自分が考え出した数学の理論を友人に書き送るのだが、そのわずか数十ペーじの書き残したものが「ガロアの理論」として近代数学のもとになったというのである。二十歳前のわたしは、自分がガロアのような天才であればどんなにか幸せであろうと思っていた。おかしな話だが、追い詰められてそんな気持ちになっていたのであろう。現実には一年二年と大学受験に失敗して、周囲の人たちからは、よっぽど頭が悪いのではないかと思われ出していたし、受験生も大学生も見るといやだという気になっていた。奴らときたら、学問が好きで本当に勉強しているのではなく、せいぜい、いい就職口を求めているだけではないか、それが証拠に勤めてしまったら、ろくに本も読みやしないんじゃないか、などと自分のことを棚に上げて思う始末だった。

反抗の姿勢を学ぶ

そんなときに、わたしは『金子光晴詩集』と『ランボオ詩集』を読んだのだった。どういうきっかけで『金子光晴詩集』を買うことになったのかは忘れてしまった。しかし、そのとき読んだ本を今でも持っていて、その表紙の見返しに一九五五年の一月二十六日に買ったことが記されている。

つまり、一年目の浪人生活が終わろうとしているときである。ほとんど勉強しなかったから、再びやってくる受験に失敗することはわかっていた。受験ということに対する反抗から絶望が気持を支配していたのが、その日付けから読み取れるようだ。他の受験生が、最後の仕上げに参考書と首引きになっているとき、わたしはゆうゆうと詩集を買って読んでいたのだ。

そして読んだ『金子光晴詩集』はわたしに決定的な影響を与えたことになった。それまでにわたしの身体の中に充満して来ていた反抗心に、ことばによってはっきりとした形を与えることになったからであった。そのときに読んだ金子光晴の詩の印象は後々まで消えることがない。

わたしが買った『金子光晴詩集』は創元選書の一冊として出ていたもので、それまでの金子光晴の全詩集をまとめたものであった。わたしはその中でも『鮫』『女たちへのエレジー』『落下傘』『蛾』などの詩集に強く打たれたのだった。まず、『鮫』の一番目にある「おつとせい」は当時のわたしの気持ちにぴったりの詩であるように思えた。

そのいきの臭えこと。

くちからむんと蒸れる、

そのせなかがぬれて、はか穴のふちのようにぬらぬらしてること。

虚無をおぼえるほどいやらしい、

おゝ、憂愁よ。

そのからだの土囊のような

つづぐろいおもさ。かったるさ。

いん気な弾力。

かなしいゴム。

そのころのおもいあがってること。
凡庸ばんようなこと。

菊面きくめん。

おおきな陰囊よんり。

鼻先があおくなるほどなまぐさい、やつらの群衆におされつつ、いつも、
おいらは、反対の方角をおもっていた。

やつらがむらがる雲のように横行し

もみあう街まちが、おいらには、

ふるぼけた映画フィルムでみる

アラスカのように淋さびしかった。

一九五五年（昭和三十年）の頃は、高校生も、浪人ろうにんも、大学生も全部つめえりの黒い学生服を着ていた。わたしはその金ボタンの学生服が嫌いだった。しかし、高校生のときは